

# トリスタンとイゾルデ

2006(平成18)年7月21日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督=ケヴィン・レイノルズ/出演=ジェームズ・フランコ/トーマス・サングスター/ソフィア・マイルズ/ルーファス・シーウェル/デヴィッド・パトリック・オハラ/グラハム・ムリンズ/ヘンリー・カヴィル/リチャード・ディレーン/マーク・ストロング/ブローナー・ギャラガー (20世紀フォックス映画配給/2005年アメリカ映画/126分)

……『ロミオとジュリエット』の物語は知っていても、『トリスタンとイゾルデ』について知っているのはタイトルだけで、その内容は多くの人が知らないはず……？ ワーグナーの全三幕、4時間余の楽劇だって、きちんと観たり聴いたりした人は少ないのでは……？ そんなハンディキャップがあっても、恋物語は観れば誰でも理解でき、堪能できるもの。しかし、ローマ帝国が去った後の、アイルランドに支配されていたイギリスの暗黒時代（5世紀）の時代状況を学べば、その悲劇性とこの物語が今日まで継承されている意味がより深くわかるはず。そして、そのために読むべき資料はタップリと……。

## 「暗黒時代」のイギリスとは？

今でこそイギリスの国際的な地位はベスト5以内（？）程度に落ちているが、エリザベス女王時代のイギリスは、あんな小さな島国ながら、7つの海を支配していた世界一の大国。

ここでイングランドの歴史を少し紐解いてみれば、「あの島」に最初に流入してきたのはケルト人で、それは紀元前5世紀頃のこと。そして、ローマで初代皇帝となったシーザーが死んだのが紀元前44年だが、その頃から「この島」はローマ帝国に侵入され、ブリタニアと呼ばれるローマ帝国の属州とされた。しかし4～5世紀になると、西からはアイルランド人の、東からはサクソン人の攻撃を受

けてローマ帝国の力が弱まる中、ローマ帝国は407年にイングランドの支配を放棄し、大陸へ引き返すことになり、「この島」の暗黒時代が始まった。

映画『トリスタンとイゾルデ』が描く時代背景は、このイギリスの「暗黒時代」。この暗黒時代においては、イギリス内にはたくさんの部族が割拠し、分断されている中、アイルランドが圧倒的な支配力を誇っていた。

## 『キング・アーサー』と比較して勉強しよう

『トリスタンとイゾルデ』以上に有名なのがアーサー王伝説だが、実はこれも伝説の部分が多く、はっきりとした歴史上の事実ではないらしい。しかし私たち映画ファンは、歴史を勉強するために映画を観ているのではなく、映画を楽しむための1つの素養として歴史を勉強しているのだから、多少歴史上の事実かどうかがあいまいであっても、映画が面白ければそれでいい……。

「アーサー王伝説」についての1つの視点を示した映画が、『キング・アーサー』(04年)だが、これは今回の『トリスタンとイゾルデ』とほぼ同じ時代設定とされている(『シネマルーム6』117頁参照)。したがって、是非『トリスタンとイゾルデ』を観るについては、この『キング・アーサー』の評論も参照してもらいたい。

## 部族同盟の目論見は……？

今日アラゴン(リチャード・ディレン)はアイルランドに対抗するため、イギリス内の各部族(領主)の同盟を成立させるべく、タンタロン城に向かっていった。これに同行するのが、その息子のトリスタン(トーマス・サングスター)。アラゴンは集まった各領主たちに対して、同盟の必要性をアピールし、「誰を王にするのか？」との質問に対しては、「それは最も強い領主マーク侯(ルーファス・シーウェル)だ」と説いた。そしてその方向で合意が成立しつつあった時、城の外では不穏な動きが……。

すなわち、アイルランド王ドナカー(デヴィッド・パトリック・オハラ)はこんなイギリスでの部族同盟結成の動きをいち早く察知し、大男で武勇に優れた忠臣のモーホルト(グラハム・ムリンズ)に対して、タンタロン城の襲撃を命じて

いたのだった。アイルランド軍の乱入に不意を突かれたタンタロン城はたちまち大混乱となり、とっさにトリスタンをかくまったアラゴンも斬り殺されてしまったうえ、トリスタンを助けようとしたマークも右手首を切断されるという重傷を……。そんなマークは、失意のうちに母も殺されて孤児となったトリスタンを連れて故郷のコーンウォールへ戻らざるをえなかった。

## それから9年後……

それから9年後、アイルランド軍によって焼き討ちされていたコーンウォールのまちは再建され、城も石造りの頑強なものに生まれ変わっていた。またトリスタン（ジェームズ・フランコ）は、同じ年頃のマークの甥メロート（ヘンリー・カヴィル）らとともに、立派な騎士に成長していた。

他方、アイルランド王ドナカーの一人娘イゾルデ（ソフィア・マイルズ）も美しく成長していたが、彼女は今モーホルトとの結婚を命じられ、悶々とした日々を……。

## 「王家の葬船」とは？

トリスタンの父親アラゴンは、部族同盟結成の動きをアイルランドによって封じられて殺されたのだから、トリスタンにしてみれば海を隔てた島アイルランドは憎つくき父の敵。したがって、その王の娘であるイゾルデと顔を合わせることはもちろん、愛し合うなどということは本来ありえない話。ところが、そんなありえないことが実現したのは、「王家の葬船」に乗せられたトリスタンが、アイルランドの海岸に打ち上げられたため。

トリスタンは、コーンウォールに「奴隷狩り」にやって来たモーホルトたちを追跡し、見事にモーホルトを倒したものの、毒を塗ったモーホルトの剣によって自分自身も傷を負ったため、もはや助かる見込みがないと判断したメロートの命令によって「王家の葬船」に乗せられたのだった。

## 海岸の小屋の中で生まれた恋は……？

大男で武闘派のモーホルトが意外なことに毒の大家なら、王である父親からモ

ーホルトとの結婚を命じられていたイゾルデも、毒の知識にかけてはそれに輪をかけたものだった。これが幸いし、イゾルデの手厚い看病のおかげでトリスタンは奇跡的に命をとりとめた。しかし、これが王女の気まぐれによる秘密の火遊び程度ならよかったのだが、ヤバイのは侍女のブラーニャ（プロナー・ギャラガー）が心配したように、海岸の小屋の中で長い時間を共有しているうち、2人の間に愛が芽生えたこと。

アイルランドの王女であるうえ、モーホルトとの結婚を目前に控えているイゾルデが、コトもあろうにイギリスの若者との恋に身を焦がすなどということは、絶対に許されないこと。もちろん、イゾルデもそれは頭ではわかっているから、名前だけは明かさず、とっさに「私の名はブラーニャ」とウソをついたが、今や心身ともにトリスタンと一心同体……？

しかし、こんな秘密の幸せがいつまでも続くはずがなかった。ある日、小舟とモーホルトの剣が発見されたため、トリスタンはイゾルデが用意した小舟で脱出せざるをえなくなったが、その時トリスタンは「一緒に行こう」とイゾルデに迫った。しかし、最後まで自分が王の娘であると名乗ることのできなかつたイゾルデは「一緒にいられない運命なの。どこかで生きて、私を思い出して」と言うほかなかった。したがって、これにて2人は永遠の別れとなるはずだったが……？

## ドナカー王の次なる企みは……？

モーホルトの部下たちから「モーホルトはトリスタンに殺された」との報告を聞いたドナカー王は、イギリスへの次なる報復を考えたが、イゾルデはイヤな結婚相手死亡の知らせに思わずニヤリ……？

しかし、知恵者のドナカー王が考えた次なる企みは、イギリスの各部族の代表者を招いての武術大会の開催。そして、その賞品は何と娘イゾルデとの結婚と領地の提供というおいしいもの……。これによって、各部族の対立をより深めようという企みだが、さて……？

## 武術大会での勝利は意外な結末に……？

この武術大会の開催が部族の分断を狙うものであることを理解しつつ、トリス

タンは自分がマークの代理としてこれに参加し勝利すれば、マークを中心とした部族同盟を結成することができるかとマークに訴えたため、マークはこれを承諾。そして今日は、アイルランドで開催されるその武術大会の日。

陰謀渦巻く世界であれば、こんな機会に一気に武装蜂起してもいいのだが、そうだったのでは騎士道も何もあったものではない。もっとも、ドナカー王に騎士道の心得があるのかどうかは知らないが、ドナカー王もアイルランドでのこの大会中、「身の安全は保証した」とのお墨付きを与え、大会は順調に進んでいった。

「賞品」のイゾルデは布で顔を隠しながら、男たちの闘いの様子を見ていたが、その中にあのトリスタンがいるのを見てビックリするとともに、当然ながら隣のドナカー王にわからないようにその応援を。その甲斐あって(?)、トリスタンが優勝すると思わず喜んで、「私はあなたの妻になります」と叫んだが、実はこれはイゾルデの大きな誤解。すなわち、トリスタンはあくまでマークの代理だから、トリスタンが優勝してもイゾルデの夫となるのはトリスタンではなくマーク。またもや、意に添わない結婚となることに啞然とするイゾルデだったが、それはトリスタンも同じ……。

帰路の船の中で、「なぜあの時王女と名乗らず、ブラーニャという偽名を使ったのだ」と言ってみても、今さら仕方のないこと……。

ここでもまたトリスタンとイゾルデは結びつくことができず、マークとイゾルデとの結婚という意外な結末に……。

## 幸せ絶頂のマークだが、トリスタンは……？

考えてみればマークとイゾルデは親子ほど年の差があるはずだが、マークにしてみればイゾルデのような若くて美しい妻を迎えることができたことに大満足で、精一杯の愛をイゾルデに注ぎ込んだ。イゾルデもそんな運命を受け入れるほかになく、当初はぎこちなかったものの、日々の暮らしの中、少なくとも表面上は仲むつまじい夫婦になっていった……。

他方、こんな2人を目の前にして、どうにもかなわないのがトリスタン。マークとイゾルデの結婚がイギリスの統一のために不可欠だと考え、命がけの奮闘でそれを実現させたのだから、トリスタンはそれを喜ぶべき立場。しかしトリスタ

ンの心の中は、マークへの忠誠心とイゾルデへの愛に激しく揺れ動いた。そして、2人の仲むつまじい姿を見ると、何と嫉妬心までも……。

## 遂に2人は……？

そんなトリスタンの姿を見れば、当然イゾルデも苦しくなってくるもの。またそんな時、マークに優しくされればされるほど、うしろめたさが高まってくるもの。そんな若い2人の気持は、遂にある日、一線を越えてしまうことに……。その場所は、ローマ人の遺跡があるところ。ここで侍女のブラーニャだけを例外として、2人だけの密会が続いたが、やはりこういうことはバレるものだし、さらにそうなると運命は悪い方へ悪い方へと傾いていくもの……。

2人が密かに手を握りあう姿を目撃し、王妃イゾルデと王の後継者トリスタンとの「密通」を確信したのが、イギリスの王位を狙うウィクトレッド（マーク・ストロング）だったのが、不運の始まりだった。

## 2人だけの秘密は思わぬ国家の一大事に……

知恵者のウィクトレッドは、これをマークに報告するだけでは意味がないと考え、これを機会にアイルランドのドナカー王と通じて一気にマークを失脚させ、自分がその後ガマにつくことを狙ったから、さあ大変。ある満月の夜、ウィクトレッドの手引きによって密会の現場に駆けつけてきたのは、狩りに出たマークやドナカー王たち。何の申し開きもできないトリスタンは、マークの命令により捕えられたが、ここでのドナカー王の「わが娘を嫁がせたマークが、その娘を家臣に与えるとは何ゴトか！」との怒りの言葉が、その後の「イギリスの一大事」を宣言するものになった。

こりゃまるで、かつて徳川家康が、豊臣秀頼と淀君を頂点とした大坂城を攻めるにあたって、方広寺の鐘に「国家安康」「君臣豊楽」の文字が刻まれていたのを見て、「『国家安康』は家康の名を分断し、『君臣豊楽』は豊臣家の繁栄を願い徳川家に対する呪詛が込められている」と因縁をつけて、無理矢理「大坂冬の陣」に引きずりこんだのと同じ手口……？

ドナカー王のこの宣言によって、イギリスの部族同盟はたちまち崩壊し、マー

クやトリスタンから離反した諸侯たちはウィクトレッドやドナカー王の言うままに、マークのコーンウォール城に攻め込むことに……。

## マークはホントに太っ腹……？

『ロミオとジュリエット』は割に単純なストーリーの中で、2人の悲恋を際立たせているため、『ウエスト・サイド物語』をはじめ、さまざまな別バージョンをつくり出すことが可能。しかし、この『トリスタンとイゾルデ』の物語は、あの時代背景、すなわち、イギリスの部族同盟結成の動きとそれを阻止しようとするアイルランド王の知恵と軍勢力という背景を前提としたうえで、数奇な運命を辿ったトリスタンとイゾルデの悲恋を描いたものだから、その背景事情は動かせないもの……？

マークは自分の血統を継ぐ甥のメロートではなく、トリスタンをイギリス王の事実上の後継者と宣言し、イギリスの統一のためにすべての権力をトリスタンに継承させようとまで、トリスタンを信頼していた。

さらに、「最近妻の様子がおかしい。妻の尾行をしてくれ。そんなことを頼めるのはお前だけだ」とトリスタンに頼んだことに対して、「あなたの妻は潔白です」と答えたトリスタンが、コトもあろうに愛する妻の密通の相手だったと知ったマークのショックは、そりゃ大変なもの。もっとも、マークがトリスタンに対する怒りをいくら本人におちまけても、トリスタンが何の弁解も釈明もしなかったのは男として当然……？

しかし他方、イゾルデに対して「一体なぜ……？」と問うマークに対し、イゾルデは、「王家の葬船でアイルランドに流れ着いたトリスタンを助けた時からの恋であり、武術大会の時は、私がドナカー王の娘であることをトリスタンは知らなかったのだ」と正直に真相を説明した。

さてそこでマークは、トリスタンに対してどんな処分を下すのだろうか？ それが目玉的だが、同時にコーンウォール城はウィクトレッドとドナカー王に煽動されたイギリスの各部族とアイルランド兵の攻撃にさらされているのだから、それに対処することが先決。

そんな中、トリスタンに対してマークが下した処分とは……？ それを見れば、

あなたはきっとマークの太っ腹に驚くはず……。

## 最後の結末は……？

このようにこの映画の最後のクライマックスは、コーンウォール城に立てこもって戦うマークたちの姿を描くものになっているが、その時トリスタンとイゾルデは、それぞれどこで、どんな行動を……？

さすがにそこまですべてネタばらしをすることはできないが、このクライマックスに至るまで詳しくこの物語のポイントを整理してきたのは、私自身の記憶の整理も兼ねたもの。

すなわち、これだけ歴史上の事実を踏まえた壮大な物語になると、ある程度きちんと物語の筋やポイントを把握しておかなければ、後になって全然思い出せなくなってしてしまうもの。そのようにご理解のうえ、この映画について私の評論がここまで詳しくなってしまったことをお許しいただきたい。

『ロミオとジュリエット』では皆さんご承知のとおり、2人とも死亡してしまうし、ワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』でも、トリスタンが先にメロートの剣によって死亡し、その後イゾルデも『愛の死』を歌いながら静かに息を引き取り、マルケ王（マーク）が深い悲しみの中、2人の冥福を祈りながら幕となるのだが、さて、この映画の結末は……？

クライマックスにおける華々しい(?)コーンウォール城の攻防戦の展開と、トリスタンとイゾルデの最後の運命を、あなた自身の目でしっかりと確認してもらいたいものだ。

2006(平成18)年7月22日記